

J-STAGE NEWS

1-21VCE

J-STAGEニュース

20周年特別号

電子ジャーナルの最新情報をおとどけるJ-STAGE機関紙

J-STAGE
20th

Online ISSN:2434-4311

2019年10月21日発行

国立研究開発法人
科学技術振興機構

特別号の記事

- ◆【特別寄稿】J-STAGE 誕生 20 周年によせて 理化学研究所光量子工学研究センター 中野 明彦 副センター長
- ◆【対談】J-STAGE 誕生 20 周年によせて NISTEP 林 和弘 上席研究官 × JST 宮川 謹至
- ◆ J-STAGE が歩んだ 20 年
- ◆【シリーズ学会訪問】J-STAGE 公開第 1 号学会紹介 ～資源・素材学会～
- ◆ J-STAGE 誕生 20 周年：支援者からのメッセージ
- ◆ J-STAGE ジャーナルコンサルティング ～第 1 回ミニセミナー報告～
- ◆【来訪者紹介】Wiley, Copyright Clearance Center, RightsDirect Japan
- ◆ 編集後記 ～J-STAGE 歴代職員のつぶやき～

【特別寄稿】 J-STAGE 誕生 20 周年によせて

<https://doi.org/10.34344/jstagenews.2019.special.1>

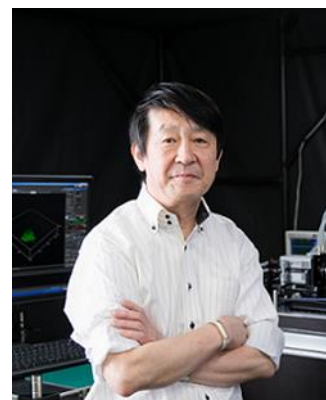
理化学研究所光量子工学研究センター 中野 明彦 副センター長
(第 1 次 J-STAGE アドバイザー委員会委員長 元日本細胞生物学会編集委員長)

まずは、J-STAGE 20 周年、おめでとうございます。

私はその歴史のかなり早い頃から関わらせていただいたので、もう 20 年も経ったのか、とちょっと感無量です。私の J-STAGE との関係は、私のメインの所属学会である日本細胞生物学会の機関誌「Cell Structure and Function」(CSF)を通じて始まりました。CSF は、1975 年創刊という伝統ある英文誌で、内容のクオリティの高さで一定の評価を得ていましたが、電頭写真などを多く含む論文を上質紙に印刷して全会員に配布していたため、刊行費用が学会運営予算を大きく圧迫し、今後どうすべきかについてずっと議論が続いていました。

1999 年に J-STAGE が運用開始になり、CSF は真っ先に参加したジャーナルの一つでしたが、その時はまだ、中西印刷に発行を任せ、J-STAGE にはその PDF 版を掲載するというスタイルであったと思います。2003 年より私が CSF の編集委員長を仰せつかったのですが、学会の活動を学術大会に集中すべしという将来計画委員会の勧告と、それを受け入れることを決めた執行部の方針により、CSF 廃刊という決定をアナウンスすることが、私の最初の大きな仕事となりました。しかし、その後激しい議論が巻き起こり、今こそ日本からの研究発信に力を注ぐべきであり、それに逆行している、完全電子ジャーナル化という道もあるのではないかと、といった議論の紆余曲折の上、結局、冊子体は廃止するが、電子ジャーナルとして大きく編集・刊行体制を変更し、優れた論文の発信を続けるという方針に変更しました。2004 年から 2005 年にかけて、朝令暮改を絵に描いたようなドタバタでしたが、今となっては懐かしい思い出です。雨降って地固まる、と自分で会報に書きました(笑)。

J-STAGE2*が立ち上がり、電子版の刊行だけでなく、投稿や査読も全てオンラインでできるような体制を整備しましたが、これは、フローチャートとそれぞれのステップでの文言を自分で作らなくてはいけないという、いやはや今から考



中野 明彦氏

えるとすさまじい手作りのシステムで、ほとんど全部私 1 人でやりましたが、完成するのに 1 年ほどかかったのが忘れられません。

冊子体を廃止し、電子ジャーナルに完全に移行するというのは、当時の国内のジャーナルとしてはかなり思い切った決断でしたので、ずいぶん話題になり、いろいろなところから講演に呼ばれました。諸悪の根源のように言われる Journal Impact Factor (JIF) も、編集・刊行の側からみればどうしても気になってしまうところですが、それまで 1 前後と低迷していた CSF の JIF が、2005 年には 3.354 にまで跳ね上がりました。

冊子体としてのページ数の体裁を心配しなくていいので、審査を厳しくし採択率を下げて、よい論文だけを掲載するという方針が JIF 上昇に効果があるのは期待していましたが、これは予想以上で、当時の国内ジャーナルの中でも一気にトップクラスに躍り出ましたので、これまたずいぶん話題になりました。ただ、よく考えてみればそんなことがすぐに JIF に反映されるはずもなく、永田和宏前編集委員長の review 特集などの努力が効を奏したものであり、またズルズルと下がっていきましました。でも、その後 10 数年を経て、今年はまだ 3.500 にまで上がってきたそうで、今度こそ本物かなとうれしく思っています。

2007 年に発足した J-STAGE アドバイザー委員会の委員長を仰せつかり、4 年間務めました。ジャーナル編集に関わる現場の方が委員に多く、J-STAGE システムのテクニカルな問題に関する議論が多かったという記憶がありますが、商業誌がどんどん力を大きくしていく中で、パブリックなジャーナルをしっかり応援していかななくてはという意識は強く持っていたつもりです。J-STAGE3*が立ち上がる目処がついたところに退任しました。当時の JST の大倉克美部長、宮川謹至課長には大変お世話になりました。



J-STAGE1*当時の CSF 誌トップ画面



J-STAGE1 当時のトップ画面

当時、折しもオープンアクセス運動が始まり、また JIF で論文を評価すべきではない、などの議論をずいぶんいたしました。今でもきわめて重要なこれらの問題に関する議論は、もう 10 年以上続いていることとなります。アンチ商業誌としての eLife の発刊、ヨーロッパでの公的資金による論文発表のオープンアクセス義務化、カリフォルニア大学のエルゼビア社との訣別など、さまざまな動きがある中で、J-STAGE のような公的制度の意義はますます大きく、我が国からの研究成果発信の受け口として、ぜひとも中心的な役割を果たし続けてほしいと心から願っています。

*J-STAGE1 : 1999~2003 年 / J-STAGE2 : 2004~2012 年 / J-STAGE3 : 2012 年~現在

【対談】 J-STAGE 誕生 20 周年によせて

<https://doi.org/10.34344/jstagenews.2019.special.2>

今回対談させていただいたのは、科学技術・学術政策研究所 (NISTEP) 科学技術予測センターの林 和弘 上席研究官です。林氏は、1990 年代半ばから日本化学会英文誌の電子ジャーナル化と日本の学術ジャーナルの電子化、XML 推進、および J-STAGE の改善に携わってきました。2007 年には J-STAGE アドバイザー委員会委員、2016 年には J-STAGE アドバイザー、2018 年には J-STAGE アドバイザー委員会委員に就任され、J-STAGE では長い間ご支援をいただいております。2012 年からは NISTEP にてオープンアクセスやオープンサイエンス政策に関連する調査研究に取り組んでおられます。

J-STAGE 誕生 20 周年にあたり、J-STAGE 運用開始当時の状況や J-STAGE との関わり、今後の J-STAGE について JST の宮川がお話をうかがいました。



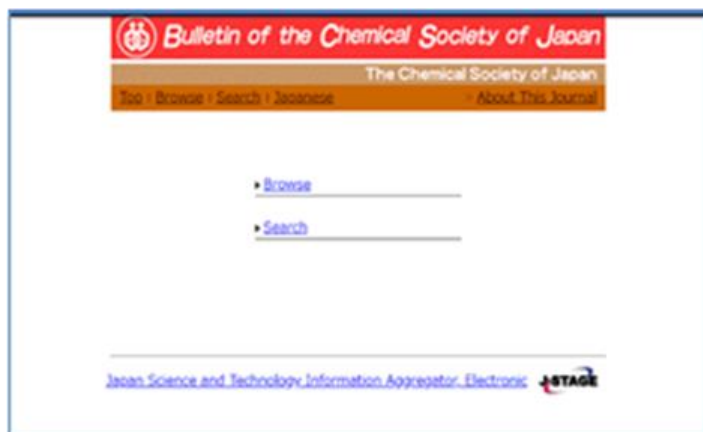
J-STAGE2*当時の
小川先生(左)と林氏

宮川) 林さんは J-STAGE スタート当時から J-STAGE にとっては切っても切れない存在となっていますが、そもそも J-STAGE と関わるようになったきっかけは何でしょうか。

林) 1990 年代中頃より、私はたまたま化学者でコンピュータ好きだったご縁から日本化学会論文誌の電子ジャーナルに関する取り組みに関わってきました。

当時の日本化学会は先駆的で、データベース (SGML) 出版を行い、学会自前のサーバで電子ジャーナルを運用していました。さらに、課金の仕組みも導入したのですが 1 学会が独自サーバで少数のジャーナルを公開するのはビジビリティとコストの両面でメリットが少なく、限界がありました。そのような折りに JST から J-STAGE へのお誘いがあり、東京大学の小川桂一郎先生 (当時) と理事会のご理解を得ながら 2000 年から J-STAGE への参画を検討し、2002 年に「Bulletin of the Chemical Society of Japan」(BCSJ) と「Chemistry Letters」(ChemLett) を J-STAGE で公開しました。その時から今日まで J-STAGE とお付き合いさせていただいています。

宮川) 私が J-STAGE の担当になったのがまさにその 2000 年で、その頃は J-STAGE の公開誌はまだ 30 程度しかありませんでした。当時、日本ではまだまだ電子化や電子ジャーナルは浸透しておらず、学会を訪問して J-STAGE の話をして訪問販売と勘違いされたりしてなかなか対応していただけないことも少なくありませんでした。学協会や関連機関の皆様の支援でそれが今や 3,000 誌を公開するところまで成長できたことは感無量です。



J-STAGE1 当時の BCSJ バナー画像



J-STAGE2 当時の ChemLett トップ画面

林) そうですね。電子化の必要性自体は皆さん理解するのですが、いざ電子化を始めようと思ってもよく分からなかったと思います。また、大変失礼ながらその頃の J-STAGE はユーザー目線が薄く、研究者にとっても、事務局にとっても使いやすいシステムとは言えませんでした。そこで J-STAGE の利用にあたっては、学会側もリソースを投じて、テコ入れをしました。具体的には、科学者や事務局はどういう思いでジャーナルに関わっているのか、どういうサービスを喜ぶかを、その背景と共に IT エンジニアが分かるように伝えることに注力しました。

さらに投稿審査システムの改善について JST、日本化学会、システム開発業者で膝を詰めた協議を進め、リニューアル (J-STAGE1.5) が行なわれました。これは J-STAGE2* の β 版だったとも言えます。当時は学会とシステム開発業者が直接話すことは珍しいことでしたが、これが気の利いたサービス開発には重要でした。

宮川) この 20 年を振りかえって、印象に残る出来事はありますか。

林) まず 2002 年頃に、今では当たり前の、Chemical Abstracts との連携 (2 次情報データベースからのリンク) ができたのは嬉しかったですね。なぜ化学会が J-STAGE に移ったかの理由の一つでもあり、化学者であれば誰もが使うデータベースから直接化学会の論文が見られるのは化学者マインドとして嬉しかったです。そして、これが後の MEDLINE や Google との連携の下地になったわけで、紙の論文誌を電子化するだけが電子ジャーナルではないと当時から一生懸命訴えていた者として大変重要な出来事です。あとは、確か 2005 年頃に始まった Journal@rchive 事業も心に残る出来事でした。



J-STAGE 意見交換会の風景

た。日本化学会誌は125年分を電子化して公開してもらいました。ただ、その時はJ-STAGEとは別サイトの公開だったのが残念でした。

2007年にアドバイザー委員会が設置され、そこに委員として参画させていただき、J-STAGE3*の仕様検討の中でJournal@rchiveをJ-STAGEに統合することが決まりました。J-STAGE3で創刊号から最新号まで一気通貫で閲覧できるようになったことで、一つの達成点を迎えたと思います。もう一つ加えるならば、共同プロモーションもやりましたね。学会年会にブースを出して、J-STAGEとその掲載ジャーナルを宣伝するという仕掛けも一緒に開発しました。という具合に、話し出すとどんどん出てくるのでこのくらいで(笑)。

宮川) これまでのJ-STAGE事業が果たした役割は何でしょうか。日本全体の電子化推進あるいは国際情報発信強化に少なからず貢献したのではないかと考えていますが。

林) 日本化学会誌について言えば、J-STAGEで公開したことによって世界で広く論文が読まれるようになったとともに、電子投稿により投稿から査読までの時間が短縮したことで論文出版が早くなり、着実に海外での認知度が上がったと言えると思います。また、経費節減効果も大きな成果です。より大きな視点から見ると、J-STAGEは日本の学術の多様性を守ってきたと思っています。学会が乱立し、個別の小さな学会では電子化対応などが難しい中でJ-STAGEがそれらをまとめ、スケールメリットを生かしながら電子化を推進し、国内外の研究者コミュニティーに日本発の知識を集めて届けるサービスを提供してきたことには大きな意義があるのではないのでしょうか。

宮川) ありがとうございます。そのような中で、海外出版社に移っていかれるジャーナルも存在しますが、このような学協会を巡る状況についてはどうお考えですか。最近はその逆の現象も見られますが、この問題に対して何をなすべきとお考えでしょうか。

林) 私自身はJ-STAGEから海外出版社に移るという流動性を頭から否定することには反対です。むしろ、移っていった原因は何なのか、あるいは何故戻ってきたのか、その要因分析を適切に行い、J-STAGEが商業出版プラットフォームと対等な国際競争力を保てるように持って行くことが大事であると思います。また、私はアドバイザーとして、J-STAGEはPublisherになるのか、ならないのか、という問題提起をよくしています。J-STAGEがさらなる発展を目指すためにはPublisherの立場でJ-STAGEに登載されている学会のコンテンツを管理するようになるのが有力な手段の一つだからです。例えば、J-STAGEが単なる論文の置き場ではなく、そのコンテンツに対しても自分事として腹を括るようになれば、Journal Impact Factorを上げることにもっと積極的になるのではないかと思います。もちろん、本当にPublisherになるのは難しいのは分かっているのですが、その気概を見せることで、実際にコンテンツを生み出している学協会との信頼関係も増すと思います。

宮川) 最後に、今後の20年を目指してJ-STAGEのあるべき姿、方向性に関してアドバイスをお願いします。

林) J-STAGE1*とJ-STAGE3を比べたらずいぶん変わりましたが、これからもJ-STAGEは変わり続けなければいけないと思います。例えば、プレプリントサーバかオープンアクセスメガジャーナルのような形に衣替えして、投稿と発行はJ-STAGE側が運用し、投稿の受付はJ-STAGEが一括して請負い、学会はピアレビュー機能の部分だけを担う、とかどうでしょう。J-STAGEは3,000誌のスケールメリットを生かして投稿と出版の面倒をみて、学会はそのコアの機能であるフィルタリングの機能である査読に特化することでWin-Winの関係が築けるのではと思います。これも取ってラジカルなストーリーを申し上げましたが、もしかしたら20年後にそのようなになっている可能性もゼロではないかもしれませんね。

宮川) ありがとうございます。新たな20年に向けてJST職員一同、さらに励んで参りたいと思います。今後の20年もどうぞよろしくお願いいたします。



JST 宮川

*J-STAGE1: 1999~2003年/J-STAGE2: 2004~2012年/J-STAGE3: 2012年~現在

◆J-STAGE TOP 画面の変遷

J-STAGE1(1999-2003)



J-STAGE1.5(J-STAGE β版)



J-STAGE2(2004-2012)



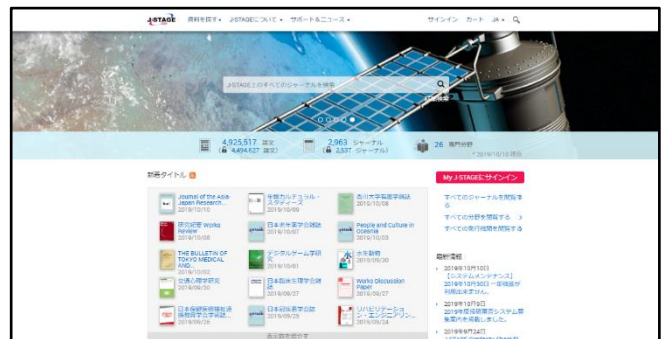
Journal@rchive(2006-2012)



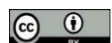
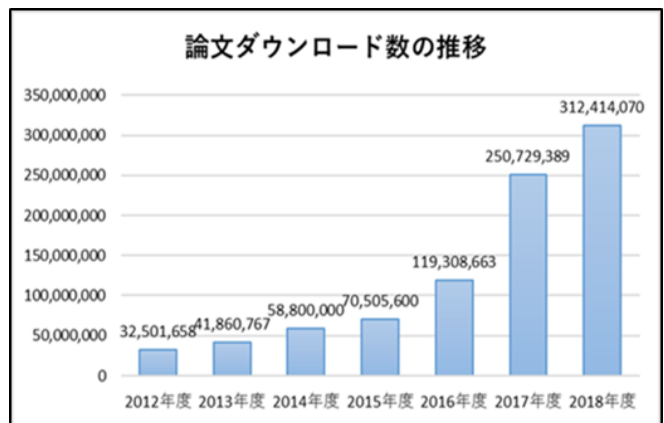
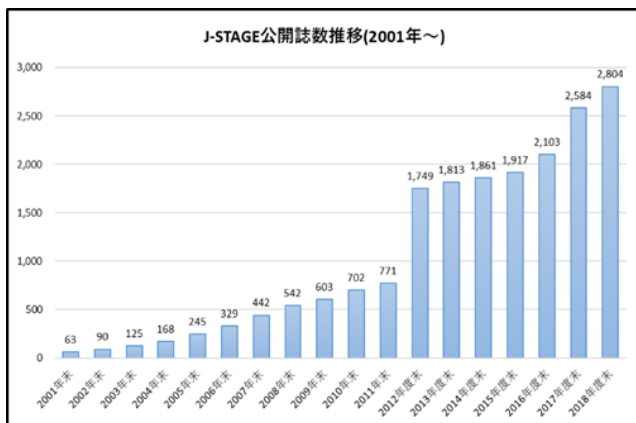
J-STAGE3/サイト画面リニューアル前(2012-2017)



J-STAGE3/サイト画面リニューアル後(2017-)



◆J-STAGE 公開誌数・ダウンロード数の推移





【シリーズ学会訪問】～資源・素材学会～

<https://doi.org/10.34344/jstagenews.2019.special.4>

今号の「シリーズ学会訪問」は J-STAGE20 周年特別号ということで、J-STAGE 公開誌第 1 号*である資源・素材学会「[Journal of MMIJ\(資源と素材\)](#)」の出版に長年携わってこられた前事務局長の岡部 進氏と、編集・出版担当理事の笹木 圭子 九州大学大学院工学研究院教授にお話をうかがいました。

*1999 年 10 月、J-STAGE は「資源と素材」「Japanese Journal of Applied Physics」「Journal of the Physical Society of Japan」の 3 誌を公開し運用を開始しました。

●この度は J-STAGE ニュース特別号のインタビューをお引き受けいただきありがとうございます。まず、貴学会と「[Journal of MMIJ\(資源と素材\)](#)」誌について、沿革・特徴をお聞かせください。

本学会は、日本鑛業會として 1885 (明治 18) 年に創設された工学系学会のなかで草分け的存在です。明治の草創期に殖産興業、富国強兵といった国策の中心に据えられた金属鉱業、石炭鉱業の近代化、増強に産官学が一体となって取り組んで行く中で、日本鑛業會ならびに会の創設当初より刊行された「日本鑛業會誌」が果たした役割は極めて大きいものがあります。その後、「日本鉱業会誌」、「資源と素材」、「[Journal of MMIJ](#)」と誌名は変遷しましたが、「採鉱冶金」をルーツに鉱物資源の開発利用すなわち探査、採鉱、選鉱、製錬に機能材料プロセスおよびこれらに關係する保安、環境、さらに最近ではリサイクル資源、リサイクルングプロセス・システムも重要な対象に加え、一貫して資源から素材に至るサプライチェーン全般を幅広くカバーしてきました。冊子体としての刊行は 2015 年の第 131 巻を最後に終了し、2016 年の第 132 巻からは J-STAGE 上で公開する完全オープンアクセスの電子ジャーナルとして現在に至っています。



J-STAGE1*当時の「資源と素材」トップ画面

●J-STAGE1*に参加されたきっかけは何でしょうか。また、当時の状況はいかがでしたでしょうか。

JST が J-STAGE という論文誌の投稿、査読、出版、閲覧、検索システムを作るにあたってモニター学会を探している中で、資源・素材学会が工学系最古の学会の一つであり、創設以来途切れることなく学会誌を刊行してきたことからお声掛けくださったと聞いています。当時の資源・素材学会では、ようやく電子ファイルでの投稿が浸透してはきたものの、まだ紙ベースでのやりとりが多く残っていました。そのような状況下、検討していたのはコスト削減、省力化、工期短縮化のための電子化でしたが、冊子体と電子公開の併設という JST の考えは我々にとって新しく、むしろコスト削減、省力化に逆行するのではないかとの疑念や、実務面での不安、さらに会費を払って会誌を読んでくださる会員へのインセンティブの消失、文献利用者からのロイヤリティ収入の減少または消失に対する警戒感など、未知であるが故の不安が多くありました。これらの問題を一つ一つ潰しながら、最終的には、電子ジャーナル化は今後の機関誌発行に当たって避けて通れない世界的な傾向であると判断して、公開系の開発に参加・協力することを決定し、1999 年に「資源と素材」を J-STAGE で公開しました。

●J-STAGE はその後、J-STAGE2、3*と変貌してまいりましたが、振り返ってみていかがでしょうか。

J-STAGE2 の時代、電子アーカイブ事業の選定誌として、1885 年の創刊号から 1988 年の第 104 巻までが電子化され [Journal@rchive](#) 上に公開されました。その後、J-STAGE3 で J-STAGE と [Journal@rchive](#) が統合され、創刊号から最新号に至る情報に容易にアクセスできるようになりましたが、これは 135 年の歴史を有する本会にとって貴重な、また誇るべき財産と言えます。また、JST も資源・素材学会内でもそれぞれに紆余曲折があった論文投稿・審査システムは、2011 年にグローバルスタンダードと言っても過言でない「[ScholarOne Manuscripts](#)」及び「[Editorial Manager](#)」が J-STAGE で提供されることになり、資源・素材学会も前者を選択利用し、今に至っています。

●貴誌の国際発信へ向けた活動、およびオープンアクセスに対する取り組みについてお聞かせください。

論文誌の最大の使命は、掲載論文を迅速に、より広く、多くの人々に読んで頂けるようなプラットフォームを提供することに尽きます。そのための方策として、国際的に有力な出版社のパッケージ販売に乗っかる、またはオープンアクセス化を推し進める、のいずれかが考えられました。幸い、当学会は財政基盤が比較的しっかりしていることから、経済的な要件に左右されることは少なく、学会誌の出版方針をたとえ模索しながらであっても、自ら考え決定できる道として、自前のオープンアクセス誌の道を選択しました。例えば、国内技術者を中心とする投稿者・読者を対象に日本語の論文を掲載することには今も根強いニーズがあります。また、サプライチェーン全体に関わる話題や、サプライチェーン全体の視点から論じることなど、当学会ならではの独自性追求の可能性を確保することも取り組み目的の一つです。そこで、引き続き J-STAGE のプラットフォームを利用し、冊子体定期刊行物では避けることのできない発行スケジュールの制約による公開の遅れをなくすためにインターネット上で受理後直ちに公開する電子ジャーナルに完全移行するとともに、読者には完全に無料で公開することを原則とする完全オープンアクセス誌を実現しました。

現在、「Journal of MMIJ」の掲載論文は英文と和文を受け入れて、英和混合誌となっていますが、すべての論文の要旨、図表はすべて英語で表記することになっており、積極的な国際発信も意識しています。英語表記の論文数を増やすべく、現在英語版の投稿規程を準備中です。

●J-STAGE の良い点、期待する点についてお聞かせください。

良いところは、公開の使用料が無料であること、海外の主要な検索エンジン、データベースと連携していること、1885年の創刊号からのアーカイブが収録・公開されており連結していること、安価な条件で投稿査読システムを利用できていること、検索がしやすいこと（検索エンジンの基本性能）、XML、DOI、ORCID など国際的な発信に不可欠なインフラ整備に取り組んでいること、でしょうか。

今後の J-STAGE に期待する点は、前身誌・後続誌と連結した一括検索ができるようになることです。

●最近の学協会を巡る状況（国内の学会が海外大手商業出版社へ移っていく状況）や課題に関してはどのようにお考えでしょうか。

何よりも、論文掲載誌の Citation Index (CI) が研究者の業績評価に直結しているため、CI の低い国内誌が投稿先として選択されにくいことが挙げられます。J-STAGE 登載誌の CI 向上に向けての J-STAGE での取り組みも種々行われてきていますが、抜本的な解決に繋がっていません。また、規模が小さく、財政基盤が脆弱な学会にとっては、海外の有力出版社のパッケージ販売に乗ることにより得られる出版コストの削減に加えて、ロイヤリティ収入も魅力となっています。J-STAGE にはこのような分配還元できる収益の仕組みがないため、経済的な魅力で劣っていると言わざるを得ません。

対策としては、1) J-STAGE に収益配分の仕組みを導入すること、2) 規模が小さく財政基盤が脆弱な学会が集まり、論文誌を共同刊行する制度の確立・普及、3) J-STAGE 掲載論文が世界に広く引用されるために、国際的な論文データベースとの連携強化、和英翻訳機能の設置、ORCID の普及促進、DOI の一元化、が挙げられると思います。また、論文誌毎ではなく論文毎あるいは研究者毎に CI が計算され、これが研究者の業績評価の一指標とされる仕組みが定着すれば、CI の高い特定の論文誌に投稿が集中することは少なくなると思います。

学会のもっとも重要な役割は、個の知を集め、体系知を創り、これを社会に還元することです。学会はこの目的のために集う研究者、技術者の活動プラットフォームであり、その手段としての学会誌を改めて定義し直すことが必要です。このために J-STAGE が果たすべき役割は極めて大きいと思います。



笹木理事（左）と 岡部顧問

●最後に、貴学会あるいは貴ジャーナルの今後の方針（抱負）についてお願いします。

本学会が網羅する天然金属資源・エネルギー資源の上流から下流、さらには素材プロセスに至る工学は、都市鉱山などの資源リサイクルがクローズアップされる今日においても、既存のプロセス無しにはリサイクルが成立しないことが明らかである以上、わが国において、けっして手放せない学問領域です。この認識に立ち、学会誌に Journal Impact Factor (JIF) を取得し、多くの研究者や技術者に国内誌としてのメリットを再認識していただくとともに、投稿先の選択肢として認知されることを目指し、学会及び学会誌に関する情報を積極的に英語で発信していくことに取り組んでいます。資源から素材に至るサプライチェーン全般を幅広くカバーすることは他誌にない強みである一方で、個々の論文の内容は多くの場合特定の領域に関するものであるため、その領域に特化した論文誌を投稿先に選択する可能性が大きいという、相反する状況がありますが、前者の強みを発揮できる論文や総説を積極的・継続的に掲載する一方で、後者の弱みを克服するために、いくつかの領域を特定し優れた論文を継続的にリクルートすることにより、論文誌の「顔」を創り、発信していくことが必要と認識しています。

●ありがとうございました。期待に添えるよう J-STAGE も頑張っけて参ります。

※J-STAGE1：1999~2003 年/J-STAGE2：2004~2012 年/J-STAGE3：2012 年~現在

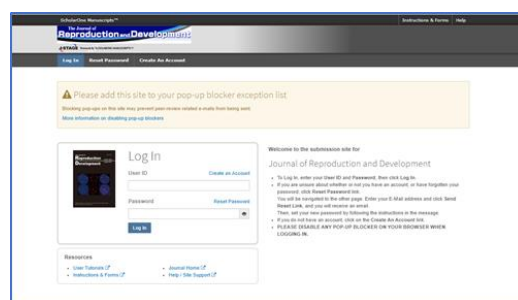
J-STAGE 誕生 20 周年：支援者からのメッセージ

<https://doi.org/10.34344/jstagegenews.2019.special.5>

J-STAGE 誕生 20 周年を節目に、古くから J-STAGE にご支援・ご協力を頂いてきた方々に J-STAGE にまつわる思い出や J-STAGE の功績、今後期待すること等についてメッセージを頂きました。紙面の都合上、一部ですが以下にご紹介します。

●今や学術誌は文系のジャーナルも含めて電子ジャーナルが当たり前になっているが、20 年前のわが国では、そもそも論文を電子版として公開することに、学会内部には賛否両論があった。そのような状況のなかで、日本化学会は J-STAGE を使うことによって、2002 年にわが国で初めて、冊子体と電子版の同時公開を実現した。また、外部データベースとのリンク、投稿・査読系の電子化、論文一部売り、電子版購読の有料化なども達成して、電子ジャーナル事業の基礎を確立した。先駆的な事業であっただけに苦労は多かったが、得られたものも大きかった。そのような機会を与えられたことに感謝している。J-STAGE は、日本の学術情報発信に必要不可欠の基盤となっており、日本の学協会への貢献はきわめて大きい。今後も安定して継続されることが何よりも大切である。（小川 桂一郎：東京大学名誉教授、武蔵野大学教授、元日本化学会論文電子化委員会委員長、第 1 次 J-STAGE アドバイザー委員会副委員長）

●当時の学会誌編集委員長の先進的な見通しにより、J-STAGE2*の JST 独自のオンライン査読システム導入に踏み切り、導入までにかかり苦労したことを記憶しています。特に、査読システムで使われるメールテンプレートの文面の編集などに多くの時間を割きました。オンライン査読システムはその後順調に推移し、現在の J-STAGE3*で導入した ScholarOne Manuscripts を活用したシステムに移行していますが、早くから導入したことで現在では当たり前のオンライン化に抵抗なく取り組めたと思います。学協会の知的財産である学会誌を商業ベースのサイトに渡すことなく、オンライン公開できていることは良いことだと思います。その点で、



Journal of Reproduction and Development
の投稿画面

J-STAGE を活用できたことは大きなメリットでした。日本独自の情報発信という意味で、今後も継続していただけることを望みます。(大蔵 聡：日本繁殖生物学会編集委員・庶務理事、第1次J-STAGE アドバイザー委員会委員)

● J-STAGE に参加した当初は、研修を含め、公開までに何か月もかかったので、実際公開されたときは、うれしく思ったことを思い出します。年何回かの J-STAGE セミナーでは、編集のルーチンワークだけでは得られないような色々なジャンルの新しいトピックが紹介され、常連の方々の熱心な質問に刺激を受けています。「Proceedings of the Japan Academy, Series B」は、学会誌のように特定の読者を持たないため、J-STAGE でのオンライン公開は読者を増やすチャンネルとしては大変重要と考えています。オンライン化を検討していたときに、実質的な選択肢としては J-STAGE しかありませんでした。その中で、J-STAGE がオンラインジャーナルの動向をキャッチアップし、技術的な発展を続けてきてくださったことは、大変意味のあることであつたと思います。鈴木章先生、大村智先生、梶田隆章先生、本庶佑先生の4名のノーベル賞受賞者の総説論文を受賞前に掲載できたことでは、J-STAGE にも多少の恩返しのできたのではないかと考えています。(竹内 基樹：日本学士院、第1次J-STAGE アドバイザー委員会委員)



J-STAGE 利用説明会の風景

● J-STAGE がスタートした当時、「電子化によって紙の冊子体が無くなるのでは？」という危惧が、ジャーナル出版に関わる印刷会社に拡がりました。しかしながらその後も紙の冊子体は残ったし、現在では電子化も印刷会社のビジネスのひとつになっていると思います。速読性、可読性の観点から欧米ではどんどん進んでいたジャーナルの電子化は、日本ではなかなか進みませんでした。国のサービスとして J-STAGE がその推進役を担い、この20年で電子ジャーナルが当たり前という意識を根付かせた功績は大きいと思います。欧米の商業出版社やプラットフォームを利用している国内の有力ジャーナルが、J-STAGE を利用したいと思えるサービス、システムにどんどん進化して行ってほしいと思います。そして、ひいてはそれが日本の研究者や研究プロジェクトの成果が J-STAGE 利用ジャーナルに集まる循環を生むと素晴らしいですね。(中井 和寛：現 J-STAGE サービス運用業者)

● 学会誌の電子公開では、大変力になっていただきました。動画の添付された論文などの配信で若干希望と合致しなかったことがあったかと記憶していますが、基本的には大変感謝しております。今後も ICT の発展に応じた対応をよろしく願います。読者が閲覧しやすい表示形式などにも期待させていただきたいと思います。(藤田 直孝：日本消化器内視鏡学会 学会誌編集委員長)

● アナログ人間の私が、たまたま担当していた部署の関係で J-STAGE に携わることになり、説明会等でもついていくのに必死でした。会社の中でもまだまだ人材が少なく、これからの印刷業界で必要とされる人材について考え方を変えていかなくてはいけないと思った記憶があります。政策が変わると無くなってしまいう仕事も多い中で、論文等を世界に発信していく場として、ぶれずにここまで続けていただけたことは、非常に素晴らしいと思っています。ユーザーインターフェースについては、もう少し洗練されていくと良いなと思います。(渡辺 るみ子：XML 推進協議会)



XML 推進協議会総会

※J-STAGE1：1999～2003年／J-STAGE2：2004～2012年／J-STAGE3：2012年～現在

J-STAGE ジャーナルコンサルティング ～第 1 回ミニセミナー報告～

<https://doi.org/10.34344/jstagenews.2019.special.6>

J-STAGE 掲載誌の質の向上に向けたジャーナルコンサルティングの新たな取り組みとして、2019 年度第 1 回目の J-STAGE ジャーナルコンサルティングミニセミナーを 8 月 9 日に開催し、オープンアクセス (OA) について積極的な検討・取り組みを行っている J-STAGE 掲載誌 8 ジャーナル 14 名が参加しました。

本セミナーでは、はじめに OA の背景やメリット等について説明し、続いて OA の要件である二次利用範囲の規定として広く用いられている Creative Commons (CC) ライセンスについて、導入時の検討事項や設定方法等を説明しました。また、OA を実現した後のアクションとして、さらに信頼される OA ジャーナルとなるための方策のひとつである DOAJ への登録申請についても紹介しました。



J-STAGE ジャーナルコンサルティング
～第 1 回ミニセミナー～

最後に、ジャーナルが抱えている課題を知り、改善点を探すための現状評価の実施方法について説明しました。ジャーナルが研究分野において認知され、信頼されるためには、運営基盤、編集方針、コンテンツの質および量、ビジネスモデル、Web 関連の技術的側面、マーケティングといった要素の確立が必要であるとされています。本セミナーでは、上記の要素に加えて、ジャーナルの投稿規定、Aims & Scope、Web サイトを対象に評価を行うこととし、評価の方法およびその結果を踏まえたうえで取り組むべき課題の選定方法を紹介しました。今回参加したジャーナルに対する現状評価は、海外コンサルティング会社と JST が共同で行い、結果を各ジャーナルへ提供しました。

参加者からは、「有用な情報がたくさん聞けて大変有意義なセミナーだった」「資料の踏み込み具合が高く、すぐに活用できるものばかりだ」等の感想をいただきました。本セミナーへの参加を機に、OA への取り組みやジャーナルの基盤改善が行われ、今後も質の向上のためのさらなるアクションにつながっていくことを期待しています。



【来訪者紹介】 Wiley, Copyright Clearance Center, RightsDirect Japan

<https://doi.org/10.34344/jstagenews.2019.special.7>

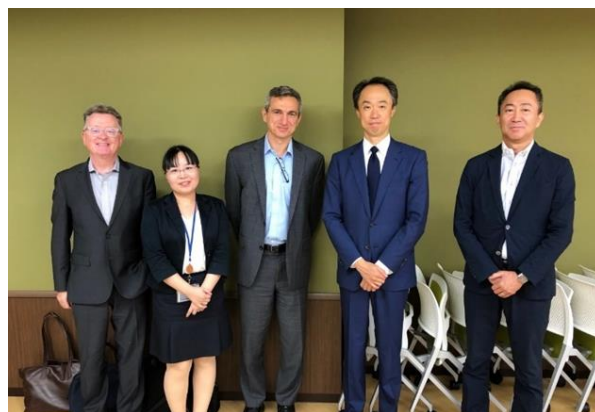
J-STAGE では、出版社、プラットフォーム、テクノロジープロバイダといった、学術コミュニケーションに係る海外機関から来訪者をお迎えし、意見交換等を行っています。本欄では、随時来訪者を紹介いたします。

◆2019 年 8 月 Wiley



Ms. Liz Ferguson
(Vice President, Open Research, 右から 4 人目)
Mr. Ben Townsend
(Vice President, Global Library Sales, EMEA & APAC, 左から 4 人目)

◆2019 年 9 月 Copyright Clearance Center・RightsDirect Japan



Dr. Haralambos "Babis" Marmanis
(CCC Executive Vice President & CTO, 左から 3 人目)
富井 俊行 氏 (RightsDirect Japan マネージングディレクター、
右から 1 人目)

【編集後記】～J-STAGE 歴代職員のつぶやき～

<https://doi.org/10.34344/jstagenews.2019.special.8>

●Journal@rchiveの使命は、各学会誌の過去分について、紙媒体のままではいずれ保存が限界になるので、電子化して将来に資産として継続的につなげるということ、端的にはこれだと思えます。各学会誌の過去分を集めて（借りて）、スキャンし、データを作成して、サイトに公開してゆく、そう考えると単純なのですが、実際にやってみると、論文スキャンデータがきれいに作成されていなかったり、データが弐式通りに作成されていなかったり、予想以上に困難でした。そのような中で嬉しかったことは、公開された時に学会の方から「ありがとう。いつでもどこでもインターネット接続環境があれば論文を見れるなんて嬉しいよ」と、お声がけ頂いたことです。（2007～2009年 Journal@rchive 担当：飯田正樹）



●電子ジャーナル部門に配属になった最初の頃は学会さんの勧誘活動が主でした。説明しても理解してもらえず、なかなか加入してくれるところは少なかったです。J-STAGE3の開発に向けてコンサルティング会社、開発会社、データ移行会社などと打合せをしつつ進めたのですが、データ移行、実データによる検証が充分でなくリリース直前で問題が発覚し、リリースを1ヶ月ずらさざるを得ず学会さんにご迷惑をお掛けしてしまったことなど思い出されます。世界の学術コンテンツとつながりつつアーカイブとしての役割も果たせるよう学術基盤として技術面、ビジネス面の動向をフォローしつづけていただきたいと思います。（2003～2013年 J-STAGE 担当：久保田壮一）

●小さな研究会であっても、情熱と努力次第で“一丁前”の学術ジャーナルを電子発行できてしまうというのは、ともあれ画期的なこと。早い時期から DOI を付与する体系を登録システムと一体で提供できた（しかも基本無償で）ことも大きな魅力だったと思います。ただ、ここまで成長した J-STAGE としてのスケールメリットを生かしきれていないようにも思います。「J-STAGE ファミリー」という意識をもっと醸成し、ブランドとして世界に発信する工夫ができれば良い（反省を込めて）。ともあれ、J-STAGE に「中の人」として関わる日々はとても刺激的なものでした。J-STAGE とそのチーム各位、学協会のみなさまとの出会いがなければ、人生がつまらなかったと思います。（2008～2015年 J-STAGE 担当：青山幸太）

●登載する雑誌のバックナンバーを学会の担当者に準備いただいて、事務所に押しかけて夜遅くまで1冊ずつ記事を確認しながら、掲載するもの/しないものを一緒に選り分けていると、初めてお会いした方々なのに不思議な連帯感と情熱が沸いてきました。この共同作業の過程があったから、その後も続く大変な作業を学会も JST も、相手の顔を思い浮かべながらよし頑張ろう！と思えたのだな、と楽しい日々を思い出します。メンテナンス等で休止しているときに twitter で「J-STAGE」で検索したら、「困る！」「死活問題だ！」というツイートが結構沢山あって、想像以上に普及してインフラになっているのだなと感慨深く思うと共に、最近 Google 等で検索すると、J-STAGE のコンテンツに当たることが結構あって嬉しいです。（2010～2014年 Journal@rchive, JaLC, J-STAGE 担当：土屋江里）

●J-STAGE 開始時は日本のジャーナルの電子化がほとんど行われておらず、財政的に豊かではない日本の学協会にとってはありがたい仕組みだったのではないかと思います。卒業していった学会もありますが、参加学協会数・登載誌数も増え、それなりの知名度とアクセス数を得ていることは、充分評価できるのではないのでしょうか。世の中はいまオープンアクセスが潮流となっていますが、全文アクセスの認証や課金（ペーパー・ビュー）など当初準備した機能が使われなくなっていくのを見るのは複雑な心境です。（2003～2008年、2017年～ J-STAGE 担当：和田光俊）

●Journal@rchive 業務のため毎日東大附属図書館（本郷、駒場、柏）に通った2007年の夏は、実際の気温に関係なく今までで最も暑い夏でした。様々な資料の電子アーカイブ化を支援しましたが、特に、重要な分野にも関わらず基礎研究で会員数が多くなく、企業からの支援も無い中、地道に頑張り続けている学会の論文誌の電子アーカイブ化を支援できたことは、とても嬉しかった、良い思い出です。短い間でしたが密度の濃い時間を過ごさせていただき、J-STAGE に携われてよかったと思っています。海外出版者に出て行った大手学会がみんな「また載せて欲しい」と戻ってくるサイトになるよう期待しています。（2006～2008年 Journal@rchive 担当：岩島真理）

2つの Twitter を、ぜひフォローしてください！

◆JST 公式 Twitter (@JST_info) https://twitter.com/JST_info
プレスリリース・募集案内・イベント情報などをお届けします。

◆J-STAGE 公式 Twitter (@jstage_ej) https://twitter.com/jstage_ej
メンテナンス・プレスリリース・イベント情報などをお届けします。

J-STAGE ニュース 20周年特別号 2019年10月21日発行

編集 : 国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST)
情報基盤事業部 研究成果情報グループ

発行人 : 情報基盤事業部長 小賀坂康志
〒102-8666 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ

電話 : 03-5214-8837(ダイヤルイン)

E-MAIL : contact@jstage.jst.go.jp

J-STAGE www.jstage.jst.go.jp

J-STAGE および J-STAGE ニュースに関するご意見・ご質問をお待ちしております。

JST 情報基盤事業部 研究成果情報グループ (contact@jstage.jst.go.jp)

© 2019 Japan Science and Technology Agency

